

小・中・高等学校を通じた英語教育強化に関する取組について

- 英語教育については、日本再興戦略、教育再生実行会議等における英語教育改革の指摘を踏まえ、平成26年度から改革の方向性を先取りした取り組みを開始。これらの政府提言を受けて、昨年9月にとりまとめていただいた「英語教育の在り方に関する有識者会議」報告の指摘も踏まえつつ、今後、①カリキュラム開発、②教材開発、③研修、④養成、⑤英語力調査、⑥ALT等の充実など学校の支援体制の充実など、次期学習指導要領改訂に向けた取り組みを順次、実施。
- 外国語WGにおいては、これらの取組の中から論点に沿って、今後の方向性の議論の参考に資する取組状況、検証結果から把握された成果・効果、課題などを適宜報告。

1. 英語教育強化地域拠点事業における取組状況（小学校）	2
2. 平成27年度英語教育強化地域拠点事業における小学校英語教科化 に向けた教材活用に係る取組状況	17
3. 群馬県教育委員会における取組事例	29
4. 学校法人光華女子学園における取組事例	41
5. 島根県教育委員会における取組事例	66
（参考資料）英語教育強化地域拠点事業について 補助教材に関する資料	77

平成27年度 英語教育強化地域拠点事業における取組状況（小学校）

1. 調査の目的

- 英語教育強化地域拠点における研究の取組状況を把握し、現時点の成果・効果や課題を分析した上で関係者が情報を共有し、強化地域拠点や研究指定校の今後の研究の充実に資する。
- 具体的な取組の状況について調査し、次期学習指導要領の改訂に向けた中央教育審議会における議論の参考とし、今後の施策の検討に資する。

※本事業は平成26年度より4年間実施予定

2. 調査の対象・期間

- 調査対象
英語教育強化地域拠点事業 研究指定校 113校/113校
- 調査期間
平成27年10月15日～平成27年10月27日
- 主な調査項目
 - ①学習到達目標（例：CAN-DO形式）の設定及びそれに基づいた指導と評価（例：パフォーマンス評価）に関すること
 - ②「外国語活動型（中学年）」、「教科型（高学年）」を意識した教材開発に関すること
 - ③言語能力を効果的に高めるための国語教育との連携、短時間学習（帯学習、モジュール学習）の取組状況に関すること 等

3. 主な取組状況

（1）研究指定校共通の取組

- 3・4年生は活動型（週1コマ）、5・6年生は教科型（週1コマ程度）
- 学級担任を中心とした授業を実施（一部の地域でALT（外国語指導助手）、支援員とのチーム・ティーチングを実施）
- 学習到達目標・評価
ほとんどの小学校でCAN-DO形式の学習到達目標を設定。
そのうち、多くの小学校がパフォーマンス評価を実施。内容はインタビューやスピーチなどスピーキングの形態による評価が中心。
- 教材開発
ほぼすべての小学校が「教科型」への接続を意識した中学年用「外国語活動型」教材を開発・活用。
そのうち、ほぼすべての小学校が3～6年生で文部科学省作成の「Hi, friends!」の枠組みを活用し、半数を超える小学校が自作教材を開発。

（2）研究指定校の特色ある取組

- 言語能力を効果的に高めるための国語教育との連携教育
半数近くの小学校で実施。現時点では音の違い、文字表記の仕方、文構造の違いへの気づきに関する内容が主な取組。
- 短時間学習
文部科学省の新しい補助教材「Hi, friends! Plus」や市販・独自教材を活用したアルファベット文字の練習、短文作成などを実施。

4. 主な調査結果分析

(1) 学習到達目標の設定、評価方法の工夫・改善

- 77.9%の小学校でCAN-DO形式の学習到達目標を設定していると回答。
 - 93.8%の小学校が設定した学習到達目標に達するため、指導方法の工夫・改善を行っている
 - 94.7%の小学校が評価方法の工夫・改善を行っている
- そのうち、58.9%にあたる小学校が、パフォーマンス評価を実施。
・パフォーマンス評価の内容はインタビュー(82.8%)やスピーチ(67.2%)などスピーキングに関する評価の割合が高く、ライティングに関する割合は15.9%にとどまる。

〈成果・効果〉と〈課題〉 (自由記述抜粋)

〈成果・効果〉

- CAN-DO形式の到達目標を設定することにより、児童に「つけたい力」が明確になり、単元計画および評価計画の作成ができ、単元末のパフォーマンス課題を児童の実態にあわせて、楽しく工夫することができるようになった。
- 学習の到達目標を設定することによって、指導内容の焦点化が図られ、児童につけさせたい力を明確にした指導が行われるようになってきた。
- パフォーマンス課題を単元の最初に示すことで学習内容や取り組む姿勢が充実したものになってきている。
- 3年生から6年生まで授業で扱った語や表現を繰り返し学ぶ年間カリキュラムを組むことで、5・6年生の英語科の授業において、学習内容の定着がみられるようになった。

〈課題〉

- 指導方法や教材等を工夫しないと、発音することの難しさや書くことに対する抵抗感など、苦手意識をもつ児童も中には見られる。
- アルファベット文字の読み書き以外に、どこまでの内容を目標として設定するか明確にできていない。
- 学年別の「読むこと」「書くこと」の具体的な目標と学習内容を段階的・系統的に示す必要がある。
- 高学年になるほど内容が難しくなり、理解不足になったり自信が持てなくなったりする。児童が安心して自信を持って取り組んでいけるように、繰り返し活動を十分に行ったり、コミュニケーション活動を工夫したりしていく必要がある。

(2) 小学校「教科型」への接続を意識した教材の開発・活用

- 93.8%の小学校が「教科型」への接続を意識した教材を開発・活用していると回答。そのうち、67.9%の小学校が自作教材を開発している。自作教材の内容は「絵カード」が93.1%と最も高く、次いで「デジタル教材」（38.9%）となっている。
- 教材の活用については、94.3%の小学校が「『Hi, friends!』児童用テキスト」を活用していると回答。以下、「Hi, friends!」デジタル教材（89.6%）、デジタル教材「Hi, friends! Plus」（85.2%）と文部科学省作成教材となっている。

〈成果・効果〉と〈課題〉（自由記述抜粋）

〈成果・効果〉

- 3・4年生から様々な英語表現に慣れ親しませることで自然と「書く・読む」に対する意欲を持ち始める児童が増え、高学年でそれを導入することは効果が高いと感じた。
- 学習到達目標に基づく教材を開発・活用したことで、5・6年生の英語科の授業において、学習内容の定着がみられるようになった。
- アルファベットの小文字の習熟度が大幅に上がった。また、音についての認識を深めたことが、単語を覚える力にもつながっている。英単語を識別できるようになったことで、意欲も高まっている。

〈課題〉

- 6年生では「書くこと」「読むこと」の指導が加わったが、小学校で行う「書くこと」「読むこと」の内容と、中学校での「書くこと」「読むこと」の内容のとの違いを小中の教員がお互いに理解し、中学校での指導に生かしていく必要がある。
- アルファベットや英単語を場面設定なしに、ただ単に繰り返し書く活動を行った場合、児童に意欲の低下が見られた。文字について、児童が意欲的に取り組めるよう工夫していく必要がある。
- 3・4年生で「Hi, friends! 1」を使っているが、内容が合わない部分があるように感じたので、3・4年生の発達段階に応じた教材が必要。

(3) 言語能力を効果的に高めるための国語教育との連携

- 国語教育との連携は、43.4%の小学校で実施していると回答。取組の内容は、音の違い(63.3%)、文字表記の仕方(61.2%)、文構造の違いへの気づき(44.9%)が上位。

〈成果・効果〉と〈課題〉(自由記述抜粋)

〈成果・効果〉

- 他教科と関連付けた学習内容を設定することによって、活動の中で**児童に積極性が見られた。**

〈課題〉

- ローマ字習得の時期とアルファベット導入の時期の関係や、発音とつづりの関係を扱うかどうか、また扱う場合はどの段階で行うのかなど、**児童の様子を見ながら更に具体的に検討する必要がある。**

(4) 短時間学習

- 短時間学習は、3・4年生で24.8%、5年生で31.9%、6年生で32.7%の小学校で実施していると回答。実施時間の平均時間は3・4年生が11.6分、5・6年生が12.5分。週当たりの回数はすべての学年で平均2.5回であった。

〈成果・効果〉

〈成果・効果〉と〈課題〉(自由記述抜粋)

- 1単位時間の指導における帯活動(スモールトーク)の導入やモジュール活動の実施により、**英語を聞くことに対する関心・意欲が高まった。**
- モジュール(Fun Time)で「文字を読んだり書いたり」することに取り組み、自分の話す英語をより理解して話すことができるようになったことで、**既習の表現を活用したり歌詞をヒントにしたりして会話の幅が広がった。**
- 短時間学習を行うことで、英語に慣れ親しむ機会が増えた。その効果として「話す」「聞く」力が付いてきた。特に「聞く」力が伸び、ALTの英語の指示にも戸惑うことが少なくなった。

〈課題〉

- 短時間学習の時間の確保をしていくことが、**難しい時期もある。**時間帯も含めて、どのようにしていくのか再度検討する必要がある。
- 短時間学習について、より**具体的かつ系統立った学習効果をねらい、内容を改善する必要がある。**

（５）小学校外国語活動の全体に関する記述〈抜粋〉

〈成果・効果〉

- 1年生からの英語の導入により、中・高学年における英語の習得が無理のないかたちで行われるようになった。
- 他教科等との連携をしながら郷土について英語で発信する取組を行うことで、児童に郷土愛やアイデンティティを育むきっかけになった。
- 専門外であっても、積極的に教師が英語を話すことで、日本語で理解を促さなくても児童が動くことができるようになってきている。
- ペア活動、グループ活動の時間を確保し、協働学習を行うことにより、学習者の具体的なモデルの提示ができて、外国語学習に苦手意識のある児童もしっかり学習できてきた。
- 学級担任主導の授業を行っていくことのメリットを、学級担任自身が実感できるようになってきた。そのメリットとして「児童の実態を把握して、児童の反応や意欲をみとり、指導に生かすことができる」、「他の教科等との内容を活かした活動をすることができる」、「朝の会や帰りの会など、日常生活の様々な場面でも英語を使う児童が増えてきた」が挙げられる。

〈課題〉

- 時数が増えたことによる、カリキュラム作成や、日程調整等が難しい。
- 個人差が大きく、能力に応じた個別指導の在り方、特別支援学級在籍の児童に対する指導方法の検討が課題。
- 授業時間以外の学習(家庭学習、宿題等)の在り方。特に「話すこと」「聞くこと」の技能の定着のためには、学習時間の確保の仕方を工夫する必要がある。
- 学級担任の英語力・英語運用能力の改善と学級担任の英語学習に対する意識改善のための研修等の時間の確保が課題である
- 外国語の職員研修等も行っているが、全教職員の指導技術が向上するためには、まだまだ様々な実践を積む必要がある。

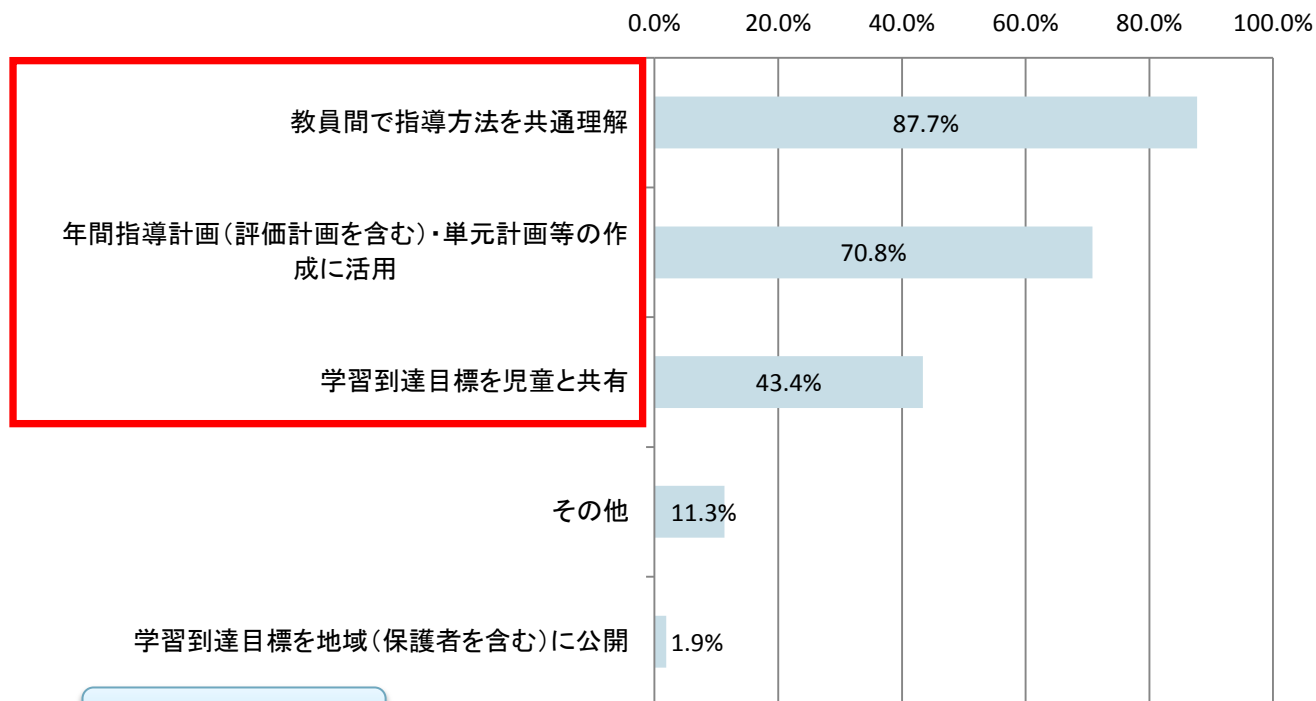


教員の英語力・指導力向上に向けた取組の充実が課題

学習到達目標の設定、評価方法の工夫・改善

1. 77.9%の小学校が「CAN-DO」形式の学習到達目標を設定
2. 93.8%の小学校が設定した学習到達目標に到達するため、指導方法の工夫・改善を行っている
3. 2で「行っている」と回答した学校のうち、87.7%が「教員間で指導方法を共通理解」して活用している

Q.設定した学習到達目標に到達するため、指導方法の工夫・改善を行っているとは回答した場合、設定した学習到達目標をどのように活用しているか？



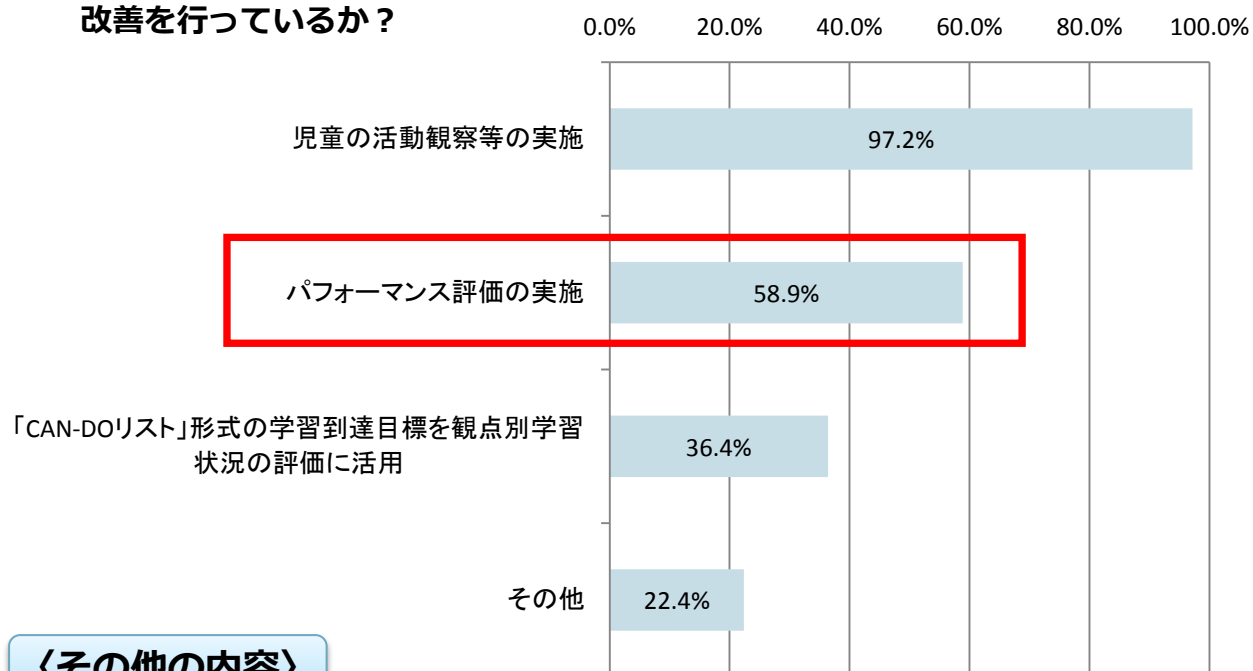
〈その他の内容〉

- ・同地域内の小中高の学校間で共有。
- ・小規模校であるため、HRTとALTの打ち合わせで児童理解についても話題にし、児童の実態にあわせた指導方法の工夫について話し合っている。
- ・校区の中学校との連携。「場面と働き」で、小中の単元をつなぐ。小中相互の授業の参観。小学6年生と中学2年生とのコラボ授業の実践。
- ・保護者へのアンケート・児童の到達度をみとり、支援の在り方を工夫する。
- ・校内主題研修にて授業研究、協議会の実施、校内主題研修の研究推進組織に、研究テーマ部を設置し、教材開発やカリキュラム作成・修正を行っている。等

4. 94.7%の小学校が評価方法の工夫・改善を行っている

5. 評価方法の工夫・改善を行っている小学校のうち、58.9%が「パフォーマンス評価の実施」をしている

Q.評価方法の工夫・改善を行っている場合、具体的にどのような工夫・改善を行っているか？

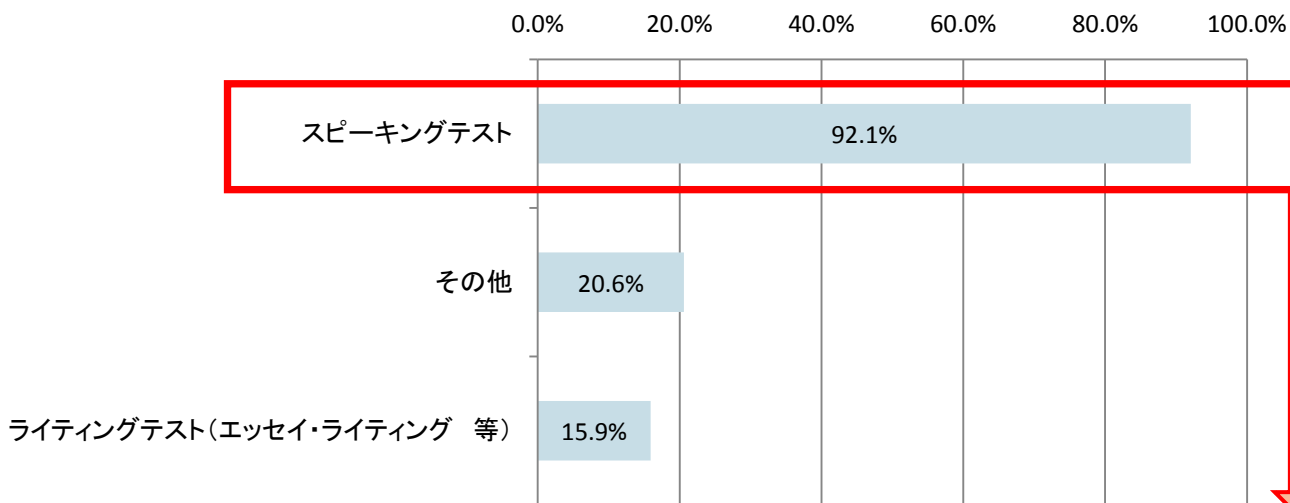


〈その他の内容〉

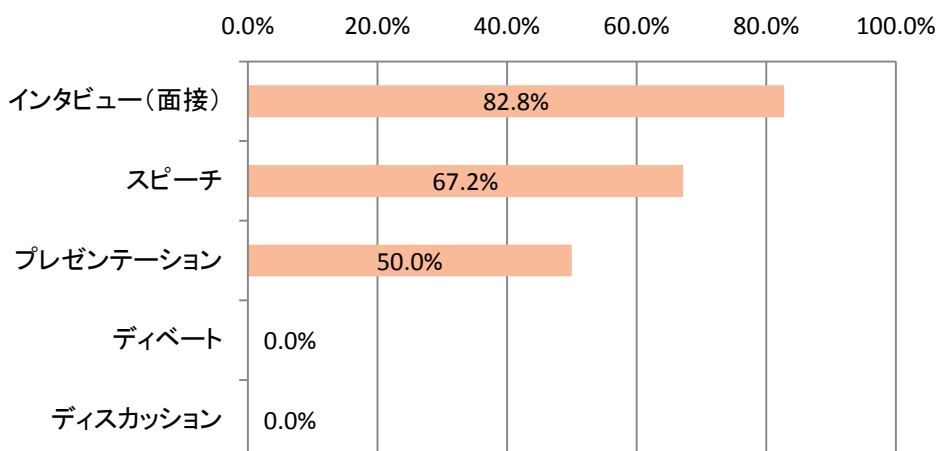
- ・児童同士による相互評価。
- ・自己評価シート(振り返りシート)の活用、確認テスト。
- ・パフォーマンステストとして特別には行っていないが、聞く話すについてはその場で評価できるようにしている。読むことについてはテキストを集団・グループ・個人等で読む場を設定し評価している。書くことについてはワークシートで評価している。
- ・授業での児童の様子や成果を学級担任と専科教員の両者でみとり、情報をお互いにシェアしながら評価を行うようにしている。
- ・英語科授業の活動中、3人の教師(ALT,HRT,VET)それぞれが良い姿の児童にステッカーを渡し、即時評価で価値づける。
- ・中学校・高等学校英語教員、大学生、留学生 等による英語活用交流会の実施。(動画記録後、分析会議の実施)
- ・児童の到達度をみとり、支援の在り方を工夫する。
- ・振り返りシートを使用し、児童は自己評価をしている。それらをポートフォリオにし、変化を見ながら児童の成長を長期的に捉える工夫をしている。等

6. パフォーマンス評価の内容はインタビューやスピーチなどスピーキングに関する評価の割合が高く、ライティングに関する割合は少数にとどまる

Q.「パフォーマンスの評価の実施」と回答した場合、具体的にどのような評価を行っているか？



スピーキングテストの内容



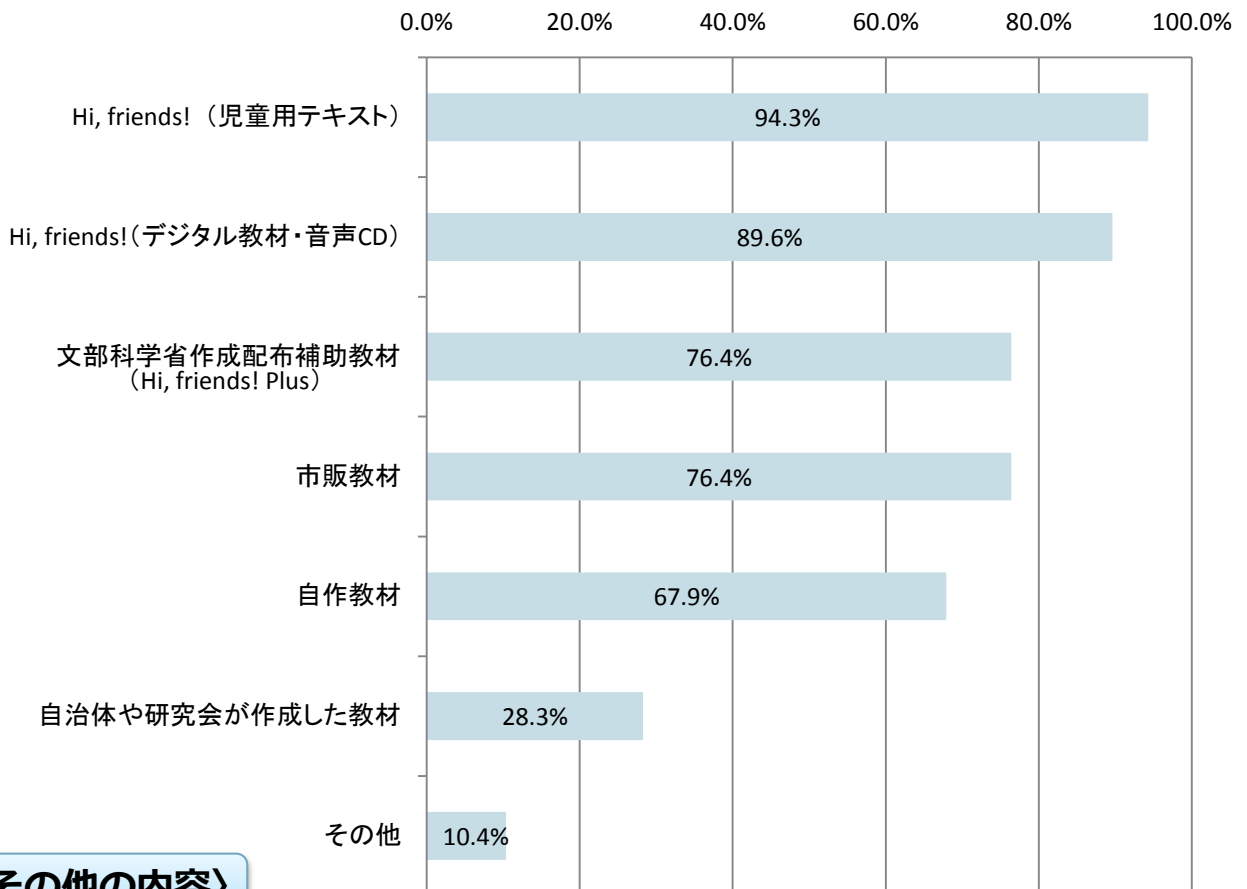
〈その他の内容〉

- ・単元終了時にゲーム、クイズ形式で児童のパフォーマンスをチェックしている。
- ・担任、ALT、コーディネーター3名による、児童の「英語を使い表現する力」の評価。
- ・国際電話等の疑似体験の場面を評価・リスニングテスト→ 例:スピーチの大まかな内容を聞き取ること。
- ・児童が互いに採点し、感想を書いたり言ったりしている。
- ・写し書きなどでできあがった旅行案内、自己紹介カード、招待状などの評価。
- ・インタビューテストの際に、アルファベットカードや絵カードを用い、文字の認識と単語の認識を問うリスニングを行っている。等

小学校「教科型」への接続を意識した教材の開発・活用

1. 93.8%の小学校が小学校「外国語活動型」において、小学校「教科型」への接続を意識した教材を開発・活用している
2. 約90%の小学校が文部科学省作成の「Hi, friends!」教材の単元構成などの要素を生かしつつ、「Hi, friends! Plus」や市販教材、自作教材を併用して「聞く」「話す」に加え、「読む」「書く」の態度の育成を含めたコミュニケーション能力の基礎を養う授業を工夫して実施している

Q. 「開発・活用している」と回答した場合、具体的にどのような形態の教材か？



〈その他の内容〉

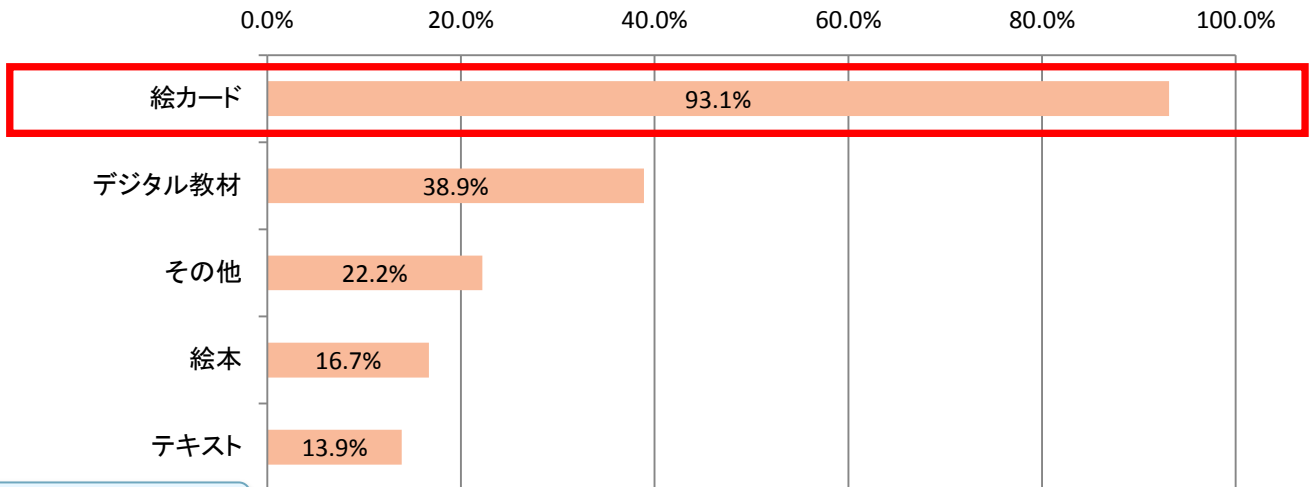
- ・テレビ局制作のビデオ教材
- ・アルファベットチャンツ
- ・フォニックスチャンツ
- ・ALTを活用したフォニックス指導
- ・インターネットを活用したデジタル教材や歌 等

小学校「教科型」への接続を意識した教材の開発・活用

3. 67.9%の小学校が自作教材を開発している

4. 自作教材の内容は「絵カード」の割合が最も高い

Q. 「自作教材を開発している」と回答した場合、具体的にどのような形態の教材か？

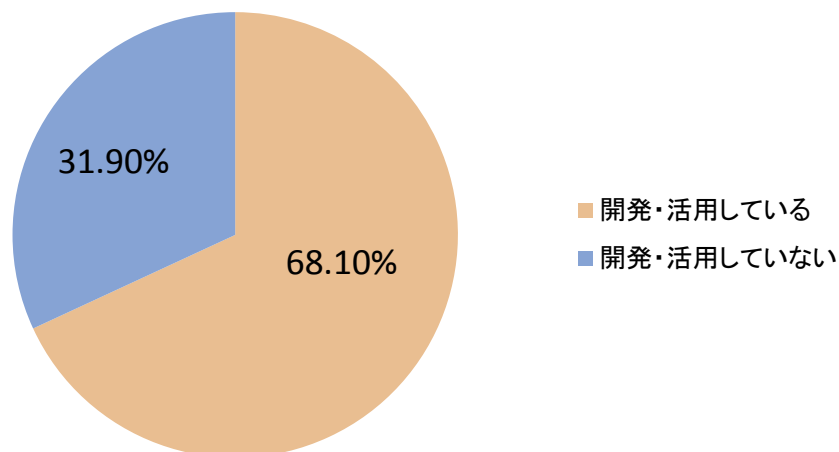


〈その他の内容〉

- ・自治体のワークシートを変えたもの
- ・プリント(3ヒントクイズ、好き・嫌いなものは？、表情絵等)道案内用の建物グッズ、地図等
- ・ワークシート／色板(タイル) 等

5. 68.1%の小学校が中学校との接続を意識した教材を開発・活用している

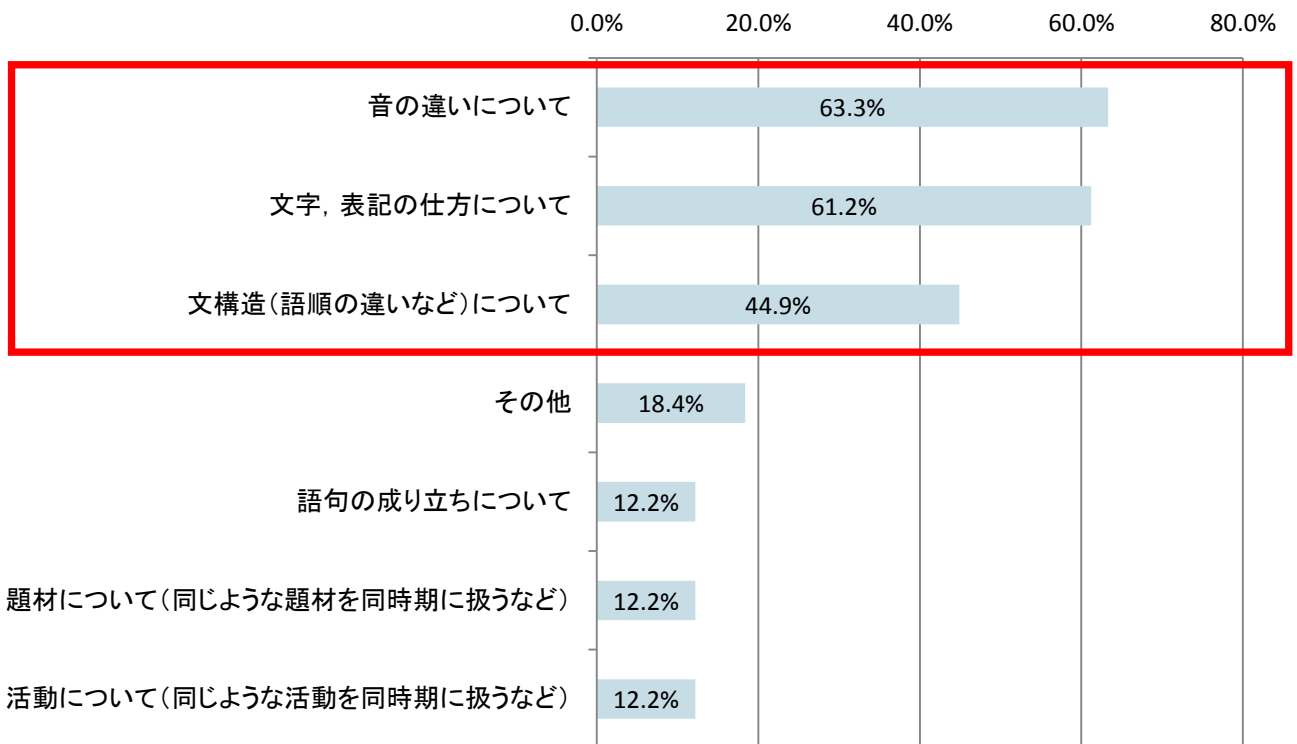
Q. 小学校「教科型」において、中学校との接続を意識した教材を開発・活用しているか？



言語能力を効果的に高めるための国語教育との連携

1. 43.4%の小学校が国語教育との連携を図った指導をしている
2. そのうち63.3%が「音の違いについて」、61.2%が「文字, 表記の仕方について」、44.9%が「文構造について」の取組をしている

Q.「国語教育と連携している」と回答した場合、具体的にどのような取組を行っているか？



〈その他の内容〉

- ・国語の授業で学習した物語等の英語の絵本を購入し、教材として使用したり、英語の絵本コーナーを設置して、休み時間や放課後に自由に読むことができるようにしている。
- ・考えを伝え合う活動(話し合い活動)に重点を置き取り組み、関連を図っている。
- ・英語の音声をたくさん聞かせることで、音の違いに気づけるような指導をしている。
- ・教師の方から文法的な教授はしていないが、音声が入っている児童が文字を目にすることで、アルファベット表記と単語の綴りの違い、単語と単語の間のスペース、ピリオド、複数形、三単元等の表記に気付くような指導を行っている。
- ・アルファベットの聞き取りを行い、記したものが単語になっていることに気づかせ、音と綴りの関係を体感できるようにしている。
- ・外来語とその元となった英単語の音の違いについて、ALTに発音してもらいその違いについて学習した。等

短時間学習

1. 短時間学習を行っている学校の実施時間の平均時間は3・4年生が11.6分、5・6年生が12.5分
2. 文部科学省の新しい補助教材「Hi, friends! Plus」や市販・独自教材を活用したアルファベット文字の練習、短文作成などを実施。詳細は事例を参照。

○短時間学習(帯学習、モジュール学習)1回あたりの平均時間

学年	1回あたりの平均時間
1年	10.8分
2年	11.0分
3年	11.6分
4年	11.6分
5年	12.4分
6年	12.5分

短時間学習に関する取組事例①

秋田県由利本荘市立由利小学校

取組の内容

- 対象・頻度：1～6年 週1回(金曜1時間目開始前)
 - 実施時間：23分(1/2単位時間)
 - 指導者：1・2年...ALTと学級担任
3・4年...学級担任
5・6年...学級担任と支援担当職員
 - 指導内容：
1～4年... 身体の部位やあいさつなどの身近な語句や表現に慣れることをねらいとしたゲーム、チャンツ等
5・6年...アルファベットの練習、家族紹介文の作成等、書くことに関する内容
- ※授業時間外に短時間学習を位置づけ、5・6年生は45分の授業の補助的内容を指導

成果・効果

- ・授業の充実に向けた内容を扱い定着を図ることにより、授業におけるコミュニケーション活動が充実し、「できた」「わかった」を児童一人一人が実感できるようになってきている。
- ・英語による自己紹介や家族紹介など目的意識をもった活動により、主体的な学びの様子が見られる。



課題

- ・書く活動を行い、定着を図りたいというねらいはあるが、ドリル的な活動をすぎると英語に抵抗感を示す児童が出てくるのではないかと懸念される。

山形県鶴岡市立朝陽第五小学校

取組の内容

- 対象・頻度：3・4年...週3回、5・6年...週3～4回
 - 実施時間：15分
 - 指導者：3～6年全て担任主導で指導しているが、担任以外も含め全教員がモジュール学習に参加し、全校体制で取り組んでいる
 - 指導内容：
3～5年...単語が添えられた絵カードを見ながらジェスチャーも交えて発音するなど、英語の音に慣れ親しむ活動
6年...上記に加え、「Hi, friends! Plus」ワークシートを活用したアルファベットの練習等、書くことを含めた活動
- ※授業時間内に短時間学習を位置づけ、5・6年生は45分の授業の導入や繰り返し学習を中心に扱う

成果・効果

- ・週に3～4回英語に触れることで繰り返し学習ができ、定着が図れる。また、ALTに臆せず話しかける姿が、どの学年においても見られるようになった。
- ・子どもたちの実態・願いをよく知っている担任だからこそ、目の前の子どもの姿から授業を作ることができる。

課題

- ・15分といえども、毎日のようにある外国語(英語)の教材研究は大変である。(教材は担任を持たない外国語教育推進担当が作成)
- ・単にゲームが楽しいという状態に陥らないように目標を明確にし、こうなってほしいという子どもの姿を褒めながら価値つけていく必要がある。
- ・短時間学習の評価をどうすべきか考えていく必要がある。

短時間学習に関する取組事例②

京都府光華小学校

取組の内容

- 対象・頻度：3～6年 週5回
 - 実施時間：9分
 - 指導者：学級担任
 - 指導内容：
 - 3・4年... 英語の音やリズムに慣れ親しむことをねらいとした週ごとに同じ内容を繰り返すゲーム、チャンツ 等
 - 5・6年... 身近なフレーズを寸劇の中で用いる「一言English」やアルファベットの練習等書くことに関する内容
- ※授業時間内に短時間学習を位置づけ、5・6年生は45分の授業の最終タスクに向けての語彙学習を中心に扱う

成果・効果

- ・毎日、習慣的に英語を使う機会を設けることで、**学校内で英語を使う意識が高まってきた。**
- ・児童からは「毎日学級担任と英語を学ぶのが楽しみだ」という意見や英語係が中心に進めている「寸劇やチャンツなどが非常に楽しい」という**前向きな意見が多い。**
- ・短時間学習で学んでいる語彙については、インタビューテストをしたところ、**非常に定着率が良かった。**

課題

- ・現在は英語専科が中心となって全学年の指導計画作成・教材開発を進めているが、児童の実態をよく知る学級担任にその役割を任せていく必要がある。そのためには、**各教員のスキル向上**に努めていかなければならない。
- ・児童中心の活動もより多く組み込めるように工夫をし、**児童と学級担任が一丸となって学びを進めるような体制を整えていきたい。**

徳島県阿波市立伊沢小学校

取組の内容

- 対象・頻度：5・6年 週3回
 - 実施時間：15分
 - 指導者：主に学級担任が担当。必要に応じてJTEとのTT。
 - 指導内容：オリジナルの絵カード作り、「Hi, friends! Plus」ワークシートを用いた文字学習等
- ※授業時間内に短時間学習を位置づけ、45分の授業内容と関連したこと、及び学校行事や他教科等と関連した活動を行う

家庭科との関連活動で作成したALTあての調理実習招待状→



成果・効果

- ・45分の授業の補足的な学習にも充てることができており、**定着が不十分であったと感じるところを重点的に学習することができた。**
- ・単元学習後の振り返りシートからは、**英語表現が身についたと回答した児童が9割を超えていた。**
- ・学校行事等と関連させた学習内容に取り組み、学習した表現を生かす場面を教育活動全体で多く作ることができた。

課題

- ・学級担任主導で進めており、**年間を通したモジュール学習の計画立案や朝の時間の準備が大変である。**
- ・英語のモジュールをすることで他教科の補足的な学習等の学習時間が減っている。

言語能力を効果的に高めるための外国語教育と国語教育の連携に関する取組事例

宇治黄檗学園宇治市立宇治小学校

取組のねらいと内容

- ①日本語と英語の共通点と相違点など児童・生徒の「ことばへの気づき」を大切にする中で、言語への関心意欲を高める
 - ・音と文字の結びつきや音素・アクセントを意識した指導・ヘボン式ローマ字指導・発音記号指導を実施し効果を検証。
 - ・英語・国語に共通している、あるいは連携が可能な教材・タスクを精査しシラバスで明確化した上で(図1)、互いを意識した指導を実現。
- ②多様な他者の考えや立場を理解し相手の意見を聞いて、自分の考えを正確に伝える力の育成
 - ・「ことばの学び」という広い視点から、教員・児童生徒が感じる課題点とそこから明らかになるニーズを分析して共有することで、あらゆる教育場面でことばの学びを意識した指導を実現(図1)。
 - ・各教科等において、教科等の特性を生かしたことばの学びにおける重点を決定し、多角的に児童生徒を育成。

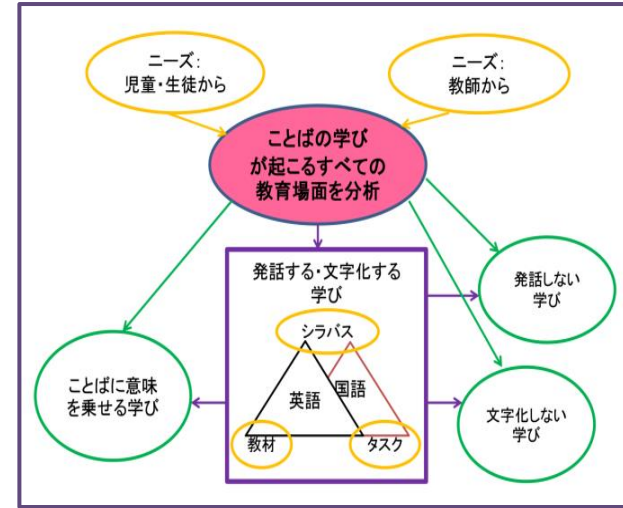


図1

成果・効果

- ①国語・英語におけるCan-Doリスト、国語・英語を併記した一貫カリキュラム(関連性を可視化)を作成
 - ・音素・アクセントを意識した指導の結果、小学校高学年の音素・アクセント感覚が有意に向上
 - ・ヘボン式ローマ字・発音記号の教材を作成し、現在小学3年生・中学1年生にそれぞれ指導中(年度末に効果検証予定)
- ②アンケート・KJ法などを通じた教員、生徒の声による定性的データの抽出
 - ・得られたデータをもとに、あらゆる教育場面におけることばの学びを系統立て(図2)、小中の全教員が共通した視点でことばの学びを意識

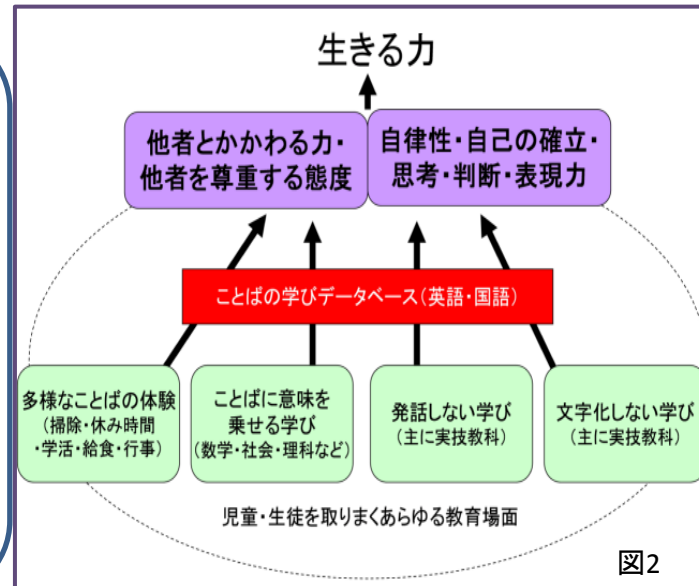


図2

課題

- ・ことばの学びの必要性については、どの教師も感じているところではあるが、ことばをどのように意識していくかは、個人によってかなり捉え方に開きが見られる。**教科・領域の特性を生かした「ことばの学び」をどのように深めていけばよいか具体化できていない現状がある。**今後、より学びを深めていくためにはどのような手立てが必要になってくるのか検証していかなければならない。
- ・現状では、まず日本語で自分の意見が言えることを第1段階の目標とし、第2段階として英語で自分の意見を言えることを目標としている。

平成27年度 英語教育強化地域拠点における小学校英語教科化に向けた教材活用に係る取組状況に関するアンケート結果の概要 (H27.)

1. 調査の目的

- 英語教育強化地域拠点における小学校英語の教科化に向けた指導・活動・教材に関する現時点の研究の現状、成果・効果、課題を把握した結果について、①関係者が情報を共有し、強化地域拠点や研究指定校の今後の研究の充実に活用するとともに、②次期学習指導要領の改訂に向けた中央教育審議会における今後の方向性の検討に活用する。

2. 調査の対象・期間

- 調査対象
平成27年度 英語教育強化地域拠点における研究指定校(113校)における本年4月以降の取組
- アンケート調査期間
平成27年10月15日～平成27年10月27日
- 主な調査項目
教科化に向けた各指導における教材(テキスト・デジタル教材・ワークシート等)の活用状況、成果・効果、課題

3. 主な調査結果

多くの学校において、Hi, friends! 2(デジタル教材含む)の枠組みを基本としつつ、新たな補助教材(Hi, friends! Plus(デジタル教材含む)及び市販・独自教材を一体的に工夫して活用した指導を実施。

(1) アルファベットの文字の認識を深める指導について

- ・ほとんどの小学校が、アルファベットの文字の認識が深まっていると回答。ただし、アルファベットの文字を認識することについては、児童の個人差が出てきているという指摘がある。
- ・指導に当たっては、Hi, friends!児童用テキストを75.2%、Hi, friends!デジタル教材を74.3%の小学校で活用しつつ、文字を書く指導において新たな補助教材も活用。

(2) 単語の認識を深める指導について

- ・小学校によって取組には差があるが、取り組んでいる学校では、3文字程度の短い単語や身近な単語に見慣れ、自ら読もうとする態度が見られると回答。その一方で、児童に個人差があるとの指摘がある。
- ・「単語に見慣れる」指導に当たっては、Hi, friends!児童用テキストを59.3%の小学校で、「単語をなぞる」指導に当たっては、補助教材ワークシートを52.2%の小学校で、「単語を読む」指導に当たっては、カードやワークシートなどの独自教材を40.7%の小学校で活用。

(3) 国語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付きを促す指導について

- ・多くの小学校で、児童が国語と英語の音声の違いについて気付き、また、英語らしい発音を心がけようとする児童もいると回答。その一方で、表記の仕方等の特徴への気付きを促す段階にない学校もあった。
- ・「音の違いに気付く」指導に当たっては、Hi, friends!デジタル教材を49.6%の小学校で、「単語と単語の間にスペースを置くことに気付く」指導においては、ワークシート等の独自教材を31.9%の小学校で活用。

(4) 国語と英語の語順の違いなど文構造への気付きを促す指導について

- ・多くの小学校が、国語と英語の語順の違いなど文構造への気付きについては今後指導する予定。(各教材の活用状況が16%を下回っている)。

※本年度4月に新たな補助教材が配布され、調査実施時期には文構造の指導が行われていない段階であり、引き続き、取組後の研究・調査・分析を行う必要がある。

教科化に向けた教材の活用状況、成果・効果、今後の課題

「英語教育のあり方に関する有識者会議」報告(平成26年9月)では、**教科化に向けた新たな指導の3つの方向性を提示**。今回は、その**3つの方向性を中心に、教材の活用状況及び、成果・効果、今後の課題を考察**。**多くの学校が現在のHi, friends!の基本枠組みを活用しつつ、新たな指導内容については文科省において作成、今年4月に配布された新たな補助教材(Hi, friends! Plus)、及び市販・独自教材を一体的に活用**。

①アルファベットの文字の認識について

- ・多くの学校で主に文部科学省作成の新たな補助教材を活用し、多くの児童がアルファベットの文字を読んだり書いたりすることを通して認識が深まっていると回答。
- ・このことから、アルファベットの文字の認識を深めることのねらいや、そのための補助教材は、高学年児童の発達段階に適していると推察。

②国語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付を促すことについて

- ・取り組んだ学校では、主に文科省の補助教材を活用し、児童が音声の違いに気付いたりしている。
- ・また、単語の認識を深めることについても、取り組んだ学校では、主に文部科学省の教材を活用し、児童が単語を読もうとする意欲・態度、姿が見られるなど回答。
- ・一方で単語の認識を深めることについては、児童に差が見られるという報告もあることから、今後、段階を追った単語の認識を深める在り方について更に具体的な検討が必要。

③語順の違いなど文構造への気付きを促すことについて

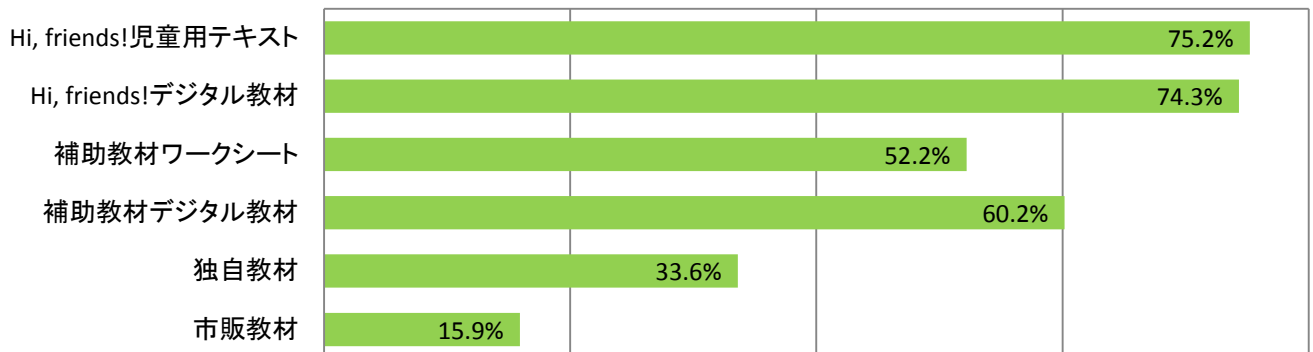
- ・年度途中の現時点では、多くの小学校で取り組みを実施しておらず数例の報告あり。どの段階で、語順の違いなど文構造への気付きを促すか、どの程度まで促すかなど今後、更に検討が必要。

(1)アルファベットの文字の認識を深める指導について

- 指導に当たり、Hi, friends!児童用テキスト・デジタル教材の活用がそれぞれ、75.2%、74.3%であり、Hi, friends!の基本枠組みを活用しながら取り組んでいる。
- 自由記述において、アルファベットの発音（読み方）は、新たな補助教材を活用しつつ、すべての小学校において児童が取り組み、アルファベットの読み方と文字の一致につながっているとの回答が多かった。

Q. アルファベットの発音をする指導で、どのような教材を活用しましたか。（複数回答）

0% 20% 40% 60% 80%

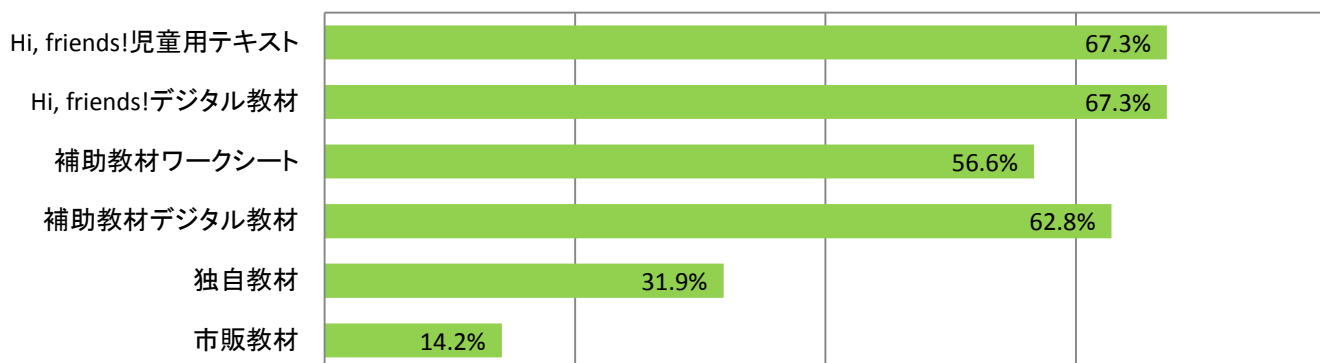


《成果（◇）と課題（△）に関する回答例》

- ◇ 音声指導と併せた書く活動が有効であった。
- ◇ 視覚的に捉えることができるので、児童の反応がよい。
- △ ジングルの活用の際、新たな補助教材のデジタル教材に文字が入っていないので、文字のあるワークシートを指しながら指導した。

- 教材については、Hi, friends!児童用テキスト（67.3%）、Hi, friends!デジタル教材（67.3%）に次いで、補助教材デジタル教材（62.8%）が活用されており、Hi, friends!の基本枠組みを活用していることが分かる。
- 自由記述において、アルファベットの文字と読み方を一致させることは、すべての小学校で児童が取り組むとともに、多くの児童が意欲的に取り組んだとの回答が多かった。

Q. アルファベットの文字と読み方を一致させる指導で、どのような教材を活用しましたか。（複数回答）

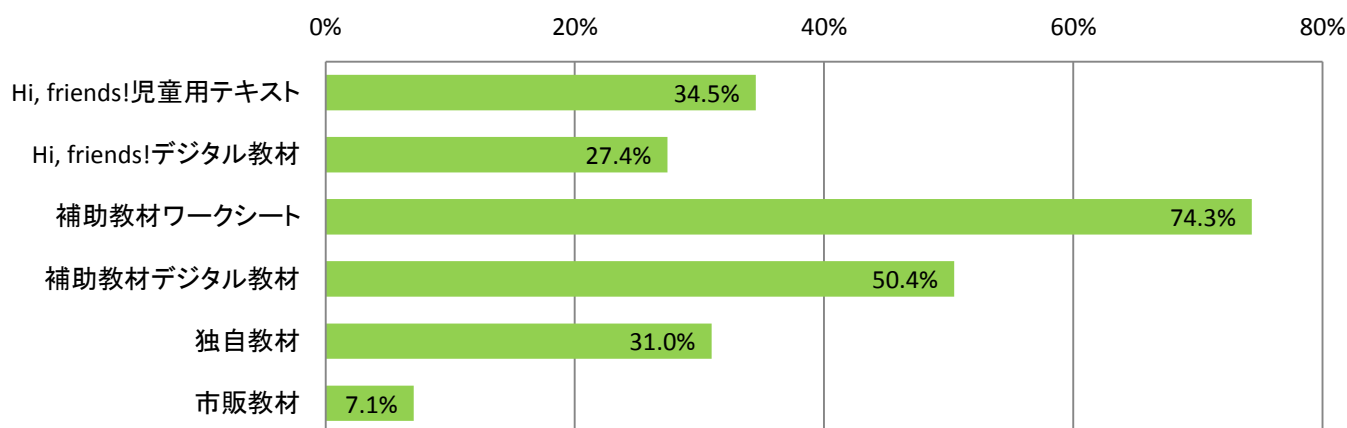


《成果（◇）と課題（△）に関する回答例》

- ◇ 補助教材デジタル教材の文字当てパズル等を活用すると、意欲的に文字の特徴を認識することができた。
- ◇ 補助教材ワークシートでアルファベットをなぞりながら発音する活動が効果的であった。
- △ イラストと文字を意識させるために、テキストやカード等に文字も示されるとよい。

- 教材としては、補助教材ワークシートが主に活用され（74.3%）、アルファベットの文字の認識の指導では、Hi, friends!の教材の基本枠組みを活用していることが分かる。
- 自由記述において、アルファベットの文字を書く取り組みは、ほとんどの全小学校で取り組んでおり、1単位時間の中で短時間をかけて数文字を扱ったり、繰り返し学習したことで、児童が読み方と文字とを一致させることができつつあるとの回答があった。

Q. アルファベットの発文字を書く指導で、どのような教材を活用しましたか。（複数回答）



《成果（◇）と課題（△）に関する回答例》

- ◇ 補助教材ワークシートで文字をなぞったり書いたりする活動を繰り返し行うことで理解を深めた。
- ◇ 補助教材デジタル教材で色が変わる書き順を見ることで、アルファベットを書いたりなぞったりすることに慣れ、短時間で書けるようになってきた。
- △ 大文字の認識は容易であるが、小文字の認識には、4線を活用して繰り返し書く活動が必要である。

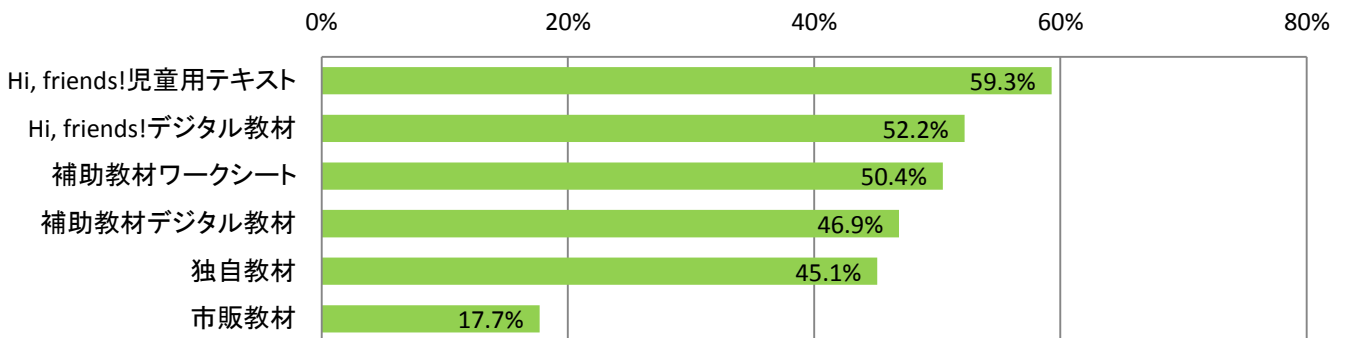
教材活用状況に関するその他の回答例

- 本時で学習したアルファベットについて、授業の終末でその文字の特徴を児童一人一人が体で表現する取組を行った。友達の身体表現を見合う中で、アルファベットの形の認識を深めることができた。
- 教育委員会が作成したワークシートや独自のワークシートなど、様々な教材を活用して、なぞり書きをしたり写し書きをしたりする活動を、段階的に繰り返し行い、アルファベットの文字への認識を深めることができた。
- 児童一人一人にホワイトボードを配り、「何度も書く」「とにかく書く」「言いながら書く」ことをねらって、ゲームを取り入れながら書く活動を行っている。新しいアルファベットとの出会いの際は、フラッシュカードを利用するなどしながら、まずは文字として認識するのではなく、音と形としての認識させることによって、正しい文字への学習につなげるための意欲付けになっている。
- アルファベットの文字と音の関係についての認識を深めることで、ローマ字との違いに気付くことができた。また、英語の単語の綴りや発音への気付きにつながる活動となった。

(2) 単語の認識を深める指導について

- 教材としては、Hi, friends!児童用テキスト（59.3%）、Hi, friends!デジタル教材（52.2%）のほかに、独自教材（45.1%）も活用されている。
- 自由記述において、ほとんどの小学校で、文字を添えた絵カード等を活用することで、児童が単語に見慣れるようになってきている、単語に興味を持ったり、3文字程度の単語であれば読もうとする児童もいるとの回答があった。一方で、時間をかけて指導する必要がある、個人差も出てきているという回答もあった。

Q. 単語に見慣れる指導で、どのような教材を活用しましたか。（複数回答）

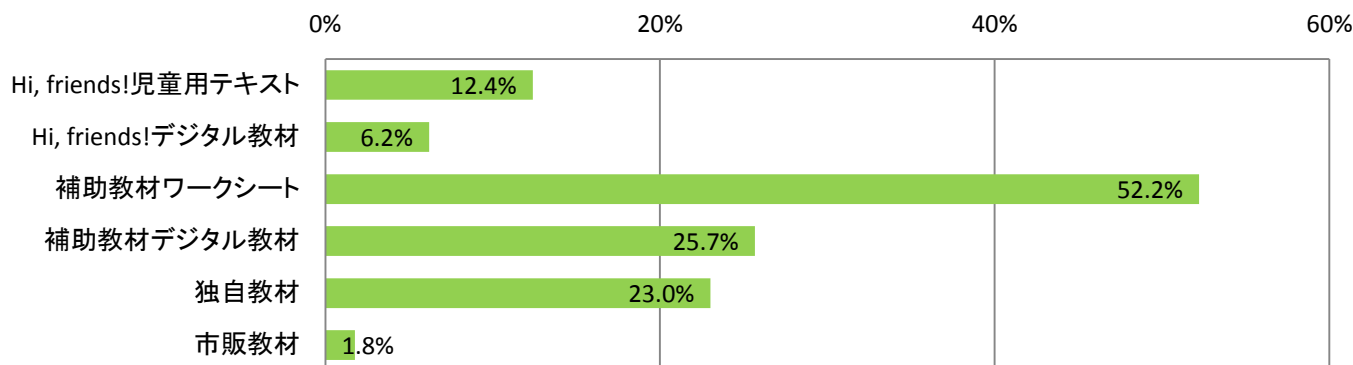


《成果（◇）と課題（△）に関する回答例》

- ◇ ピクチャーカードやHi, friends!デジタル教材に文字があることで、自然と文字に慣れ親しみ、単語の認識に効果的であった。
- ◇ 単語の中の抜けている音を探しながら学習する活動は、単語の綴りに興味を持ち、イラストを見ただけで、単語を発音できる児童が増えた。
- △ ピクチャーカードや補助教材ワークシートで扱う単語には、児童が生活の中でなじみのあるものを多く取り扱う必要がある。

- 単語をなぞる指導においては、主に補助教材ワークシートが52.2%活用されている。
- 自由記述において、ほとんどの小学校で取り組まれており、単語をなぞることで単語に見慣れ、児童の単語を読もうとしたり、単語を読んでもみたいという思いにつながっているとの回答があった。また、児童が楽しく飽きないよう様々な活動と組み合わせることで、ドリルになってしまわないよう配慮が必要であるとの回答があった。

Q. 単語をなぞる指導で、どのような教材を活用しましたか。（複数回答）

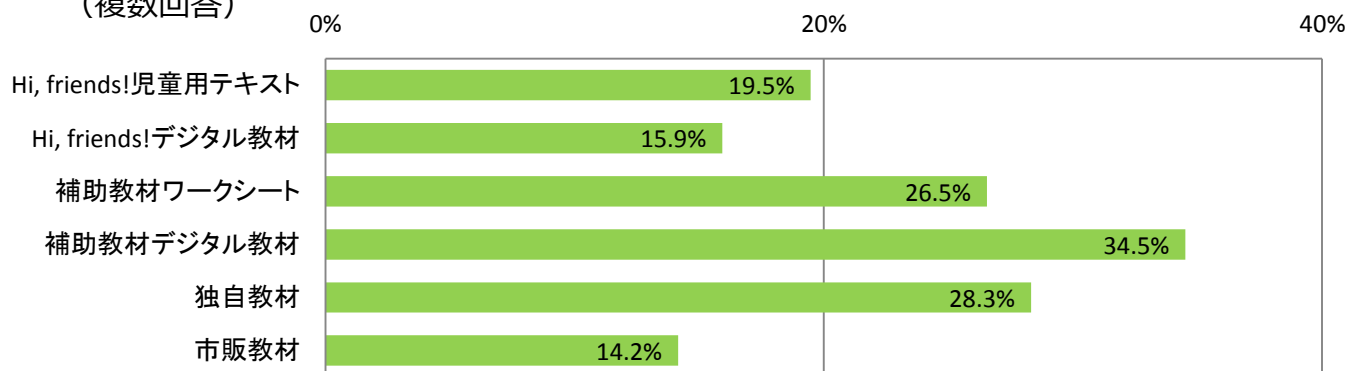


《成果（◇）と課題（△）に関する回答例》

- ◇ 単語を繰り返しなぞることで、単語が文字のまとまりであることへの理解が深まった。
- ◇ 単語を書くときの文字の位置などを正しく知り、正しく書くことを進める上で、補助教材ワークシートのなぞり書きは有効的であった。
- △ 単語をなぞることはできたが、4線の上に単語を書くことができない児童も見られた。

- 文字を添えられた絵カードや補助教材デジタル教材等を活用しながら（34.5%）、単語をなぞる活動等も通して、児童が自然に発音と綴りの関係に気付いたりする学校が数校ある。一方で、積極的に発音と綴りの関係を扱ったDVD等の独自教材（28.3%）、市販教材（14.2%）を通して指導している学校もある。

Q. 英語において発音と綴りの関係を知る指導で、どのような教材を活用しましたか。（複数回答）

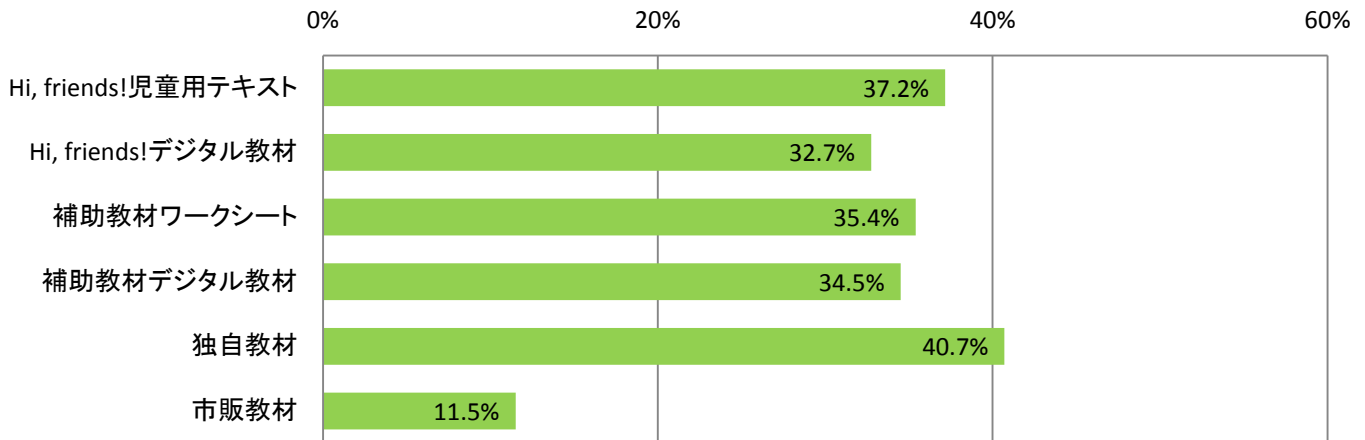


《成果（◇）と課題（△）に関する回答例》

- ◇ 補助教材デジタル教材を活用することで、アルファベットの読み方を学びながら、単語がアルファベットの音のつながりできていることに気付くことができた。
- ◇ 自作教材では、文字をなぞりながら発音することを通して、発音と綴りの認識を深めることができた。
- △ Hi, friends!デジタル教材や補助教材デジタル教材では、発音と綴りの認識を更に深めるために、歌や会話の画面に発音と同時に文字も表示するとよい。

- 独自教材（40.7%）や、Hi, friends!児童用テキスト（37.2%）等を活用して児童が発音とつづりの関係に興味をもち、単語を読もうとする姿が見られるとの回答があった。一方で、市販教材（11.5%）等を活用して発音とつづりの関係を指導する学校も見られる。

Q. 単語を読む指導で、どのような教材を活用しましたか。（複数回答）



《成果（◇）と課題（△）に関する回答例》

- ◇ 短時間学習等で、ピクチャーカードやダイアログなど、いつも単語を意識して示すことで、文字を読もうとする意識が高まった。
- ◇ 補助教材のピクチャーカード作成機能が効果的であった。3種類のカード作りの単位において導入から徐々に文字の大きさを変えて使用することにより、単語の綴りへの理解が深まった。
- △ 児童にピクチャーカード等を示す際は、綴りの難易度等を踏まえ、段階的に指導していく必要がある。

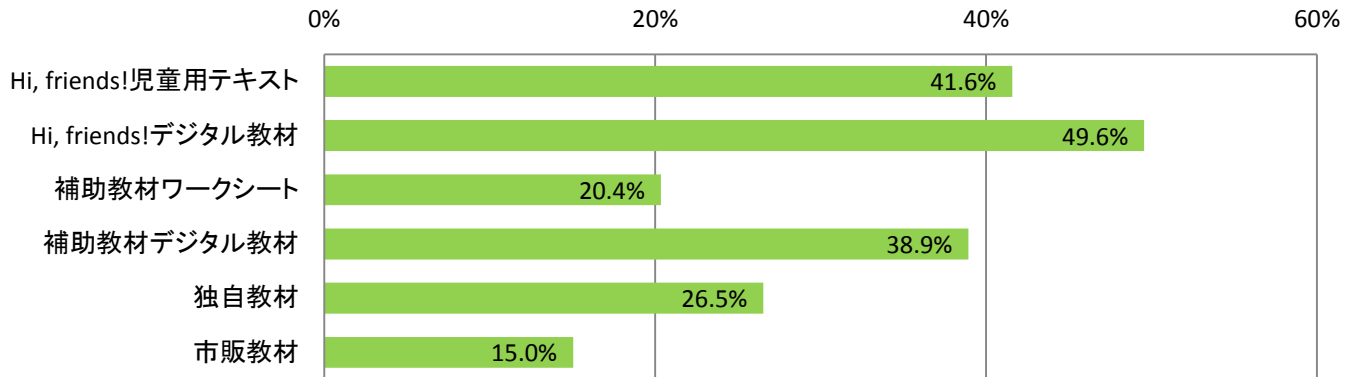
教材活用状況に関するその他の回答例

- 児童が作成したカード等を使って、英語系の児童を中心に授業の終末で、キーワードゲームやミッシングゲームに取り組んだ。児童は、楽しみながら単語の認識を深めることができた。
- 発達段階に応じて、低学年から英語絵本の読み聞かせを行った。中学年や高学年では授業の中でも取り扱った。導入時には、ねらいに沿った簡単な内容の絵本を読み聞かせることで意欲付けにつながった。展開時には、本時で扱う単語や動詞が多く出てくる内容の本を読み聞かせることで認識を深めることにつながった。終末時には、学習内容により親しみがもてるような内容の本を読み聞かせることで、学習の振り返りと次時への意欲付けにつながった。
- 児童一人一人が手に取ることができるように和英辞典を準備することで、児童は授業の中で分からない単語などを調べ、自己表現の単元で効果的に活用している。また、休憩時間等にも和英辞典を手に取る児童が増え、英語に対する関心・意欲が高まっている。

(3)国語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気づきを促す指導について

- 教材としては、Hi, friends!デジタル教材（49.6%）、Hi, friends!児童用テキスト（41.6%）が活用されている。
- 自由記述では、デジタル教材やALTの音声から、児童が国語と英語の音声の違いに気付いているとの回答が多かった。また、音の違いへの気づきについては、取り組んでいない地域や学校があったり、その取組に差があるとの回答があった。

Q. 音の違いに気付く指導で、どのような教材を活用しましたか。（複数回答）

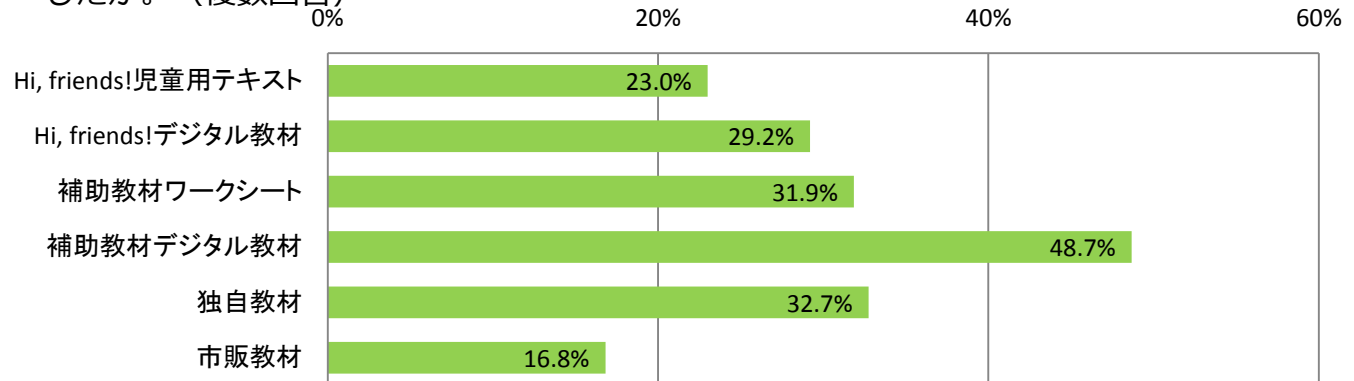


《成果（◇）と課題（△）に関する回答例》

- ◇ Hi, friends!児童用テキストやHi, friends!デジタル教材等、独自教材等でカードなどを効果的に活用することで、身近な外来語と英語の発音の違いに気付くことができました。
- ◇ Hi, friends!デジタル教材や補助教材デジタル教材等の音声教材を活用することで、日本語と英語のアクセントや音の違いを意識して聞き分けることができるようになった。
- △ 中学年では、音の違いについて英語らしく聞こえたとおりに発音してみようとする児童が多いが、高学年になると、聞こえたままという曖昧さに耐えにくいのか、単語などにカタカナ表記をするなど、カタカナ英語で発音する児童も見られた。

- 教材としては、補助教材デジタル教材（48.7%）及び補助教材ワークシート(31.9%)、独自教材(32.7%)が活用されている。
- 自由記述では、多くの小学校で、アルファベットには読み方と音があることに気付く活動に取り組み、補助教材デジタル教材に収録されているアルファベットジングルを活用してアルファベットの音に慣れ親しませているとの回答が多かった。

Q. アルファベットには読み方と音があることに気付く指導で、どのような教材を活用しましたか。（複数回答）



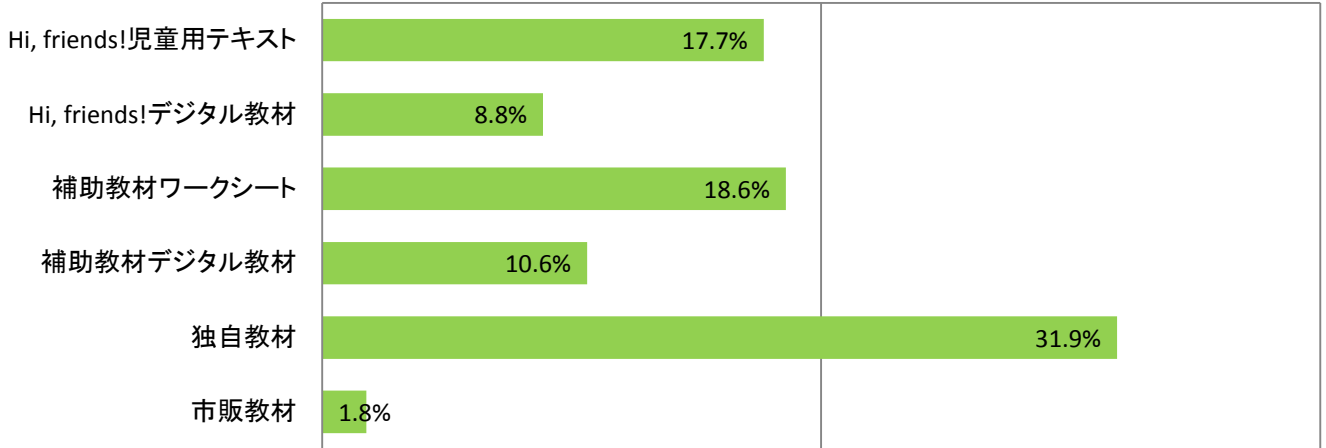
《成果（◇）と課題（△）に関する回答例》

- ◇ 補助教材デジタル教材では、視覚的に得た情報と音声を関連させて繰り返し取り組むことで、単語に合わせてアルファベットの読み方や音についての認識を深めることができました。
- ◇ 補助教材デジタル教材では、児童自身の操作で到達度に応じて速さを替えて学習することができ、各自で発音しながら意欲的に取り組むことができました。
- △ アルファベットの読み方と音の違いの理解が困難な児童もおり、より効果的な指導の工夫を検討していく必要がある。

- 教材については、独自教材を活用している場合が多い（31.9%）。
- 自由記述では、英文を書く際には、単語と単語の間にスペースを置くことに気付く活動について、半数程度の学校が取り組んでいた。

Q. 英文を書く際には、単語と単語の間にスペースを置くことに気付く指導で、どのような教材を活用しましたか。（複数回答）

0% 20% 40%



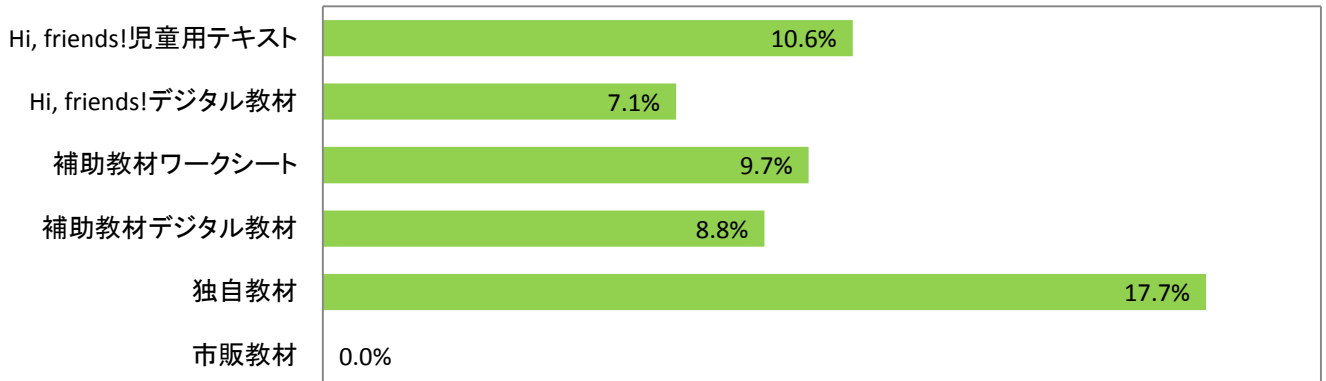
《成果（◇）と課題（△）に関する回答例》

- ◇ 独自の教材において単語や文を書き写す活動を開発し、ワークシート等に正確に書き写す活動を繰り返すことによりスペースに気付き、意識して書くことができるようになった。
- △ 補助教材ワークシートや補助教材デジタル教材にも、英文を書く際のスペースに気付かせる工夫を掲載する必要がある。

- 国語と英語では、句読点やその打ち方に違いがあることに気付く活動については、半数程度の学校が取り組み、独自教材を活用していることが多い（17.7%）。

Q. 国語と英語では、句読点やその打ち方に違いがあることに気付く指導で、どのような教材を活用しましたか。（複数回答）

0% 20%



《成果（◇）と課題（△）に関する回答例》

- ◇ 国語で扱う文章と英語の文章を比較させることで、句読点などに着目し、その違いや特徴について気付くことができた。
- ◇ 文部科学省作成の教材で取り扱う内容に加えて、句読点等を多く使う内容の教材を独自に開発し、テキストやワークシートを工夫して、句読点等に対する意識を高めた。
- △ ワークシートやデジタル教材において、句読点等に関する内容の掲載を増やす必要がある。

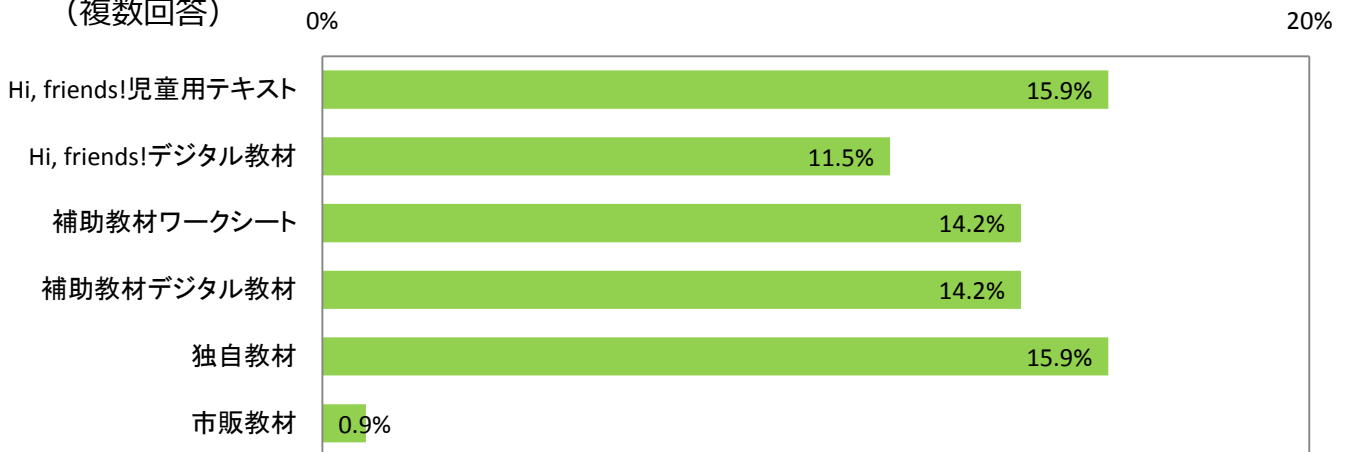
教材活用状況に関するその他の回答例

- 日本語と英語の音の違いが意識できるチャンツを活用して、繰り返し取り組むことで単語等を言い慣れさせることができた。
- フォニックスを扱ったDVDを活用して、英語の特徴的な音に気付かせ、繰り返し取り組ませることで、理解を深めさせることができた。

(4)国語と英語の語順の違いなどの文構造への気付きを促す指導について

- 自由記述においては、国語と英語では語順が違うことに気付く活動に取り組むに至っている学校は多くなかったが、取り組んでいる学校では、15.9%がHi, friends!児童用テキストと独自教材を活用し、児童に気付きを促している。

Q. 国語と英語では語順が違うことに気付く指導で、どのような教材を活用しましたか。
(複数回答)

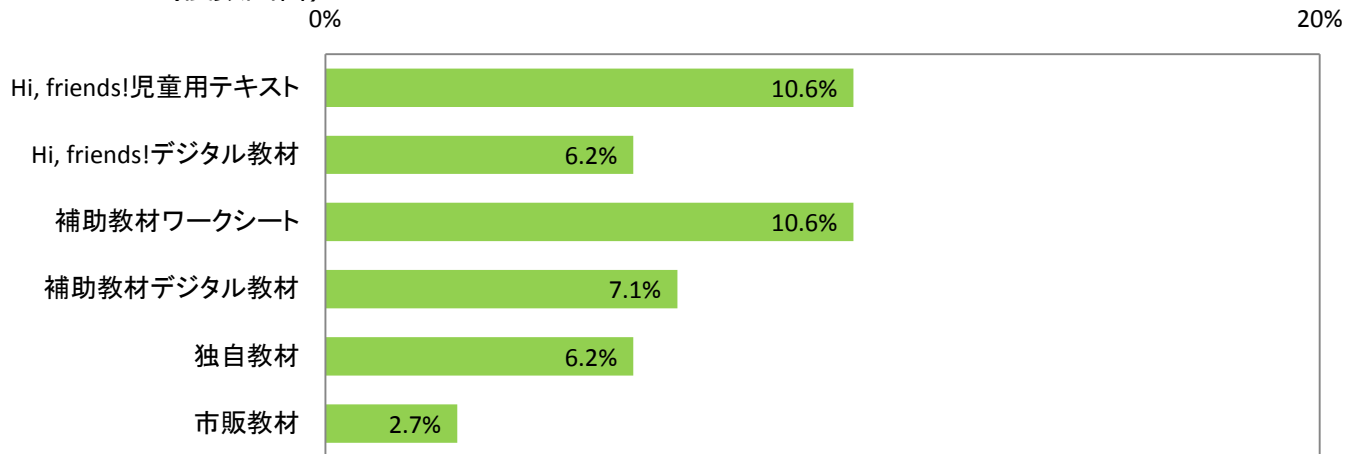


《成果（◇）と課題（△）に関する回答例》

- ◇ Hi, friends!児童用テキストに掲載されているなじみのある物語の挿絵を使って、語順への気付きを促すことができた。
- ◇ 絵本や独自で開発した文章を取り入れた教材を作成し、単語カード等を活用することにより、語順への気付きを高めることができた。
- △ 英語は日本語と異なる語順であることから、混乱する児童も見られるため、系統的な指導の在り方について検討する必要がある。

- 英語では、語順によって意味が決まることに気付く活動に取り組んでいる学校は現時点では少ない。取り組んでいる学校はHi, friends!児童用テキスト(10.6%)や、補助教材ワークシート(10.6%)を活用し気付きを促している。

Q. 英語では、語順によって意味が決まることに気付く指導で、どのような教材を活用しましたか。(複数回答)



《成果(◇)と課題(△)に関する回答例》

- ◇ 文の意味に気付かせる際、テキストやワークシートを活用して、日本語と英語では、文頭や文末などのどの部分に着目するかについて、同じ意味の文を比較させることで、気付きを高めることができた。
- △ 文構造への気付きは、国語と英語の指導の連携が大切であるため、系統的な指導の在り方を整理し、統合的に教育課程を編成することが必要である。

教材活用状況に関するその他の回答例

- スポーツの単語の学習を行った際に、ALTから様々なスポーツをする話を聞く中で「play」や「do」が付くスポーツ、スポーツの名前だけで表すものに気付く、その気付きからどのようなルールがあるのかということを考えさせた。このような活動も行うことで、文構造の違いに気付きを促すことができた。
- 日本語によるなじみのある絵本の英語版を読み聞かせることにより、ストーリーが分かっているため、主語と目的語の語順の違いに気付かせることが容易であった。

独自教材例

- Hi, friends!に準拠したピックチャーカー
- アルファベットかるた
- フラッシュカード
- ねらいに沿ったワークシート
- デジタル教材 等

市販教材例

- アルファベットの下敷き
- チャンツ
- ワークシート
- イラスト・ピックチャー・アルファベットカード
- デジタル教材
- モジュール授業を扱ったDVD
- フォニックスを扱ったDVD
- 音楽・チャンツ・会話を扱ったCD 等

4. 成果・効果

- ・文部科学省作成の補助教材については、ねらいに応じた活用により、児童の興味・関心を高め、意欲を継続させることに役立っている。
- ・各種カードについては、繰り返し活用することにより、アルファベットや単語の認識を深めさせることにも効果的である。
- ・補助教材ワークシートについては、理解と定着を図るための短時間学習等にも効果的である。
- ・Hi, friends!デジタル教材や補助教材デジタル教材については、聞き取りや発音の学習に役立ち、国語と英語の音声の違いなどに気付かせることにも効果的である。
- ・文部科学省作成の補助教材を参考にし、各学校の実態に応じたカードやワークシートを作成して活用している学校が多数ある。

5. 今後の課題

- ・アルファベットの文字の認識を深める指導においては、デジタル教材やワークシートの段階的な活用の仕方について検討する必要がある。
- ・単語の認識を深める指導においては、音と表記の関係に気付かせ、段階的に語数を増やしていくための指導の在り方や補助教材の活用の方法について検討する必要がある。
- ・カタカナやローマ字と英語の表記や発音の違いなどに気付かせるため、デジタル教材やワークシートなどを連動させながらの指導の在り方や、補助教材の活用の方法について検討する必要がある。
- ・国語と英語の語順の違いなど文構造への気付きを促すため、なじみのある絵本などを活用したり、単語カードの並べ替えをしたりするなどの活動を工夫する必要がある。
- ・以上の課題を踏まえて、いつ、どのように、どのような基準による評価を行うかについても検討する必要がある。

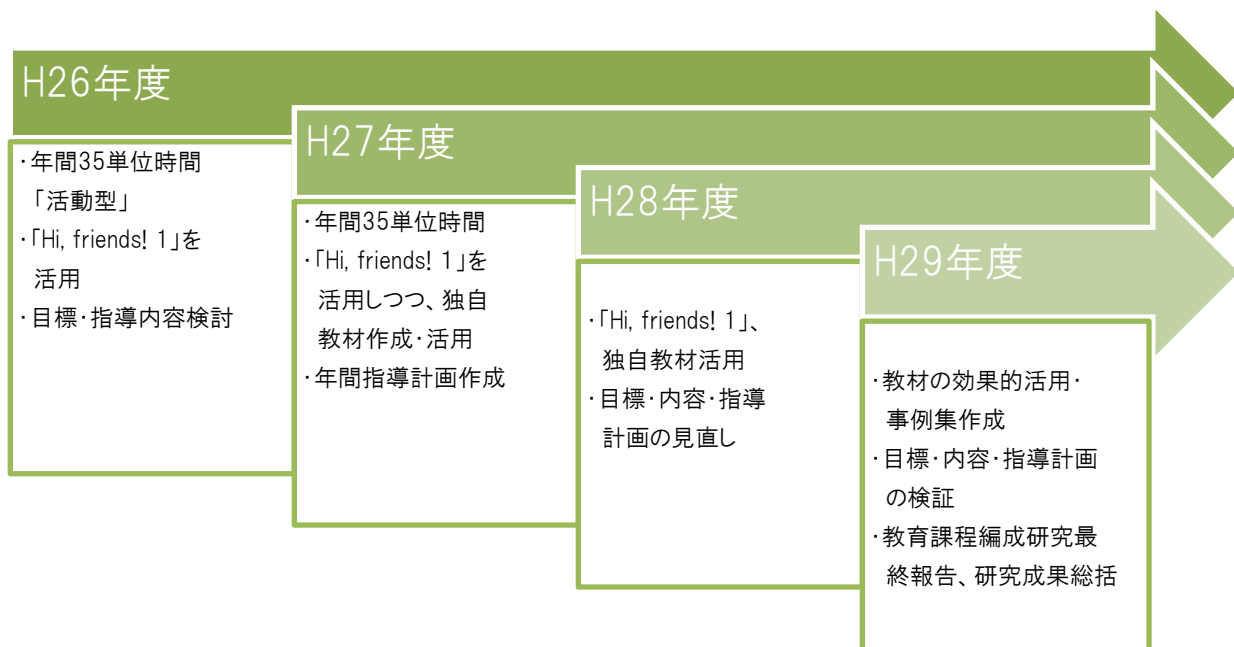
6. 特色ある取組

※別紙を参照。

- 教科化に向けた「読む」・「書く」にも重点をおいた取組について
(今後とりまとめ予定)
- 短時間学習の取組について
群馬県前橋市立桃井小学校、京都府光華小学校
- 言語能力を高めるための国語教育との関連を意識した取組について
京都市立宇治小学校
- 絵本を活用した取組について
(今後とりまとめ予定)

(参考)英語教育強化地域拠点事業における小学校外国語教育の早期化・教科化に向けた研究開発各校の取組み状況・予定

小学校3・4年生



小学校5・6年生

